

1 学校教育目標

- 学ぶ人(知) ○ 思いやる人(徳) ○ 鍛える人(体)

2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	○確かな学力と健やかな心と体を着実にはぐくむ学校 ○保護者・地域から信頼され、愛される学校 ○学校と家庭、地域が一体となり、チームとして教育活動を推し進める学校
○児童・生徒像	○将来を見つめ、自ら主体的に学ぶ生徒 ○礼儀正しく思いやりがあり、地域、社会に貢献できる生徒 ○夢や目標の実現に向けて、粘り強く自ら主体的に取り組む生徒
○教師像	○日々の授業や教育環境の充実を目指し、工夫・改善を図る教師 ○厳しくも、温かく誠実で、生徒の気持ちに寄り添える教師、生徒の個性や可能性を引き出し伸ばす、面倒見のよい教師 ○家庭・地域との信頼関係を大切にし、連携・協力しながら、問題解決を図る教師

3 学校の現状及び前年度の成果と課題

<現状と成果>

- 授業時や集団行動など、全体的に落ち着いた学校生活が営まれている。
- 生徒会活動において、中央委員会の活性化や活動の可視化が見られ、主体性をはぐくまれている。
- コミュニケーションの教室での指導は、江北ブロック内でも、模範的な指導として認められている。
- A I ドリルを授業だけでなく、家庭学習でも活用しており、教員のI C T活用能力も高くなってきている。
- 保小中連携の推進を通して、熱心な研究が行われ、身につけるべき学力について、各校種間で共通理解が図られるようになりつつある。
- 生徒会主導による異学年構成での授業等、生徒が中心となって活動する取組が浸透してきている。

<課題>

- 学力の定着・向上を図るために、学力調査等の結果・分析に基づき、授業改善及び授業外の学習の取組の一層の充実を図る。
- 基礎基本の定着に加え、主体的、対話的で深い学びの視点からの授業改善や適正な評価・評定及び指導と評価の一体化を図る。
- 全体的には、生徒の学習意欲は向上しているが、特に、数学・英語の学力の底上げが必要である。
- ねらいに応じて、これまでのICT機器の利活用に加え、生徒一人一台タブレットやA I ドリル等の効果的な活用を図る。
- 不登校問題の解決に向けて、養護教諭、S C、S S W、教育相談コーディネータ、登校サポーター、関係機関、関係幼保小等との連携の一層の充実を図る。併せて、今年度から始まるS S Rについて教職員全体で理解を深め、生徒の不登校の防止につなげる。又、巡回指導教員、特別支援教室専門員、特別支援教育コーディネータを中心に、学校全体で、組織的に連携を図り、特別支援教室の充実を図る。
- 教育活動全般を通して、自己有用感や達成感をはぐくむとともに、基礎的汎用的能力を育成するため、学校行事や生徒会・委員会・係活動・当番活動・部活動・ボランティア活動などの経験を重視する。

4 重点的な取組事項

	内 容	実施期間（年度） R:令和				
		R4	R5	R6	R7	R8
1	学力向上アクションプラン	○	○	○	○	
2	生徒の豊かな心を育む	○	○	○	○	
3	保小中連携の推進	○	○	○	○	

5 令和6年度の重点目標

重点的な取組事項－1	学力向上アクションプラン
-------------------	--------------

A 今年度の成果目標	達成基準 (目標通過率)	実施結果 (通過率結果)	コメント・課題	達成度 ◎○△●
すべての授業で、分かる授業・楽しい授業（興味・関心や知的好奇心を高める授業）・自己肯定感を高める授業を目指し、主体的に学習に取り組ませるとともに、基礎学力の一層の定着を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ・わかる授業については、令和6年度年度末到達度確認テスト60%以上の正答率を達成させる。 ・楽しい授業については、年度末の生徒アンケートで肯定的評価が70%を超えるようにする。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 20px; width: 80%; margin: auto;"> <p style="font-size: 1.2em; margin: 0;">自己評価の際に記入</p> </div>		

B 目標実現に向けた取組み

新・継	アクションプラン	対象学年 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取り組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認 方法	達成目標 (=数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
1 新規	授業力向上を目指す校内研修体制の確立	全学年 全授業	年間に2回(前期と後期でそれぞれ1回)	研修推進委員会が主導し、全員が相互に授業観察(参観)を行い、相互に評価し、授業改善につなげる。	研修推進委員会によるアンケートと年度末教員の学校評価で、肯定的評価を全教員の80%以上獲得する。	左記の調査の結果で、肯定的評価を全教員の80%以上獲得する。	<div style="border: 1px solid black; padding: 20px; width: 80%; margin: auto;"> <p style="font-size: 1.2em; margin: 0;">自己評価の際に記入</p> </div>		

2 継続	朝読書	全学年	通年で毎日実施	<ul style="list-style-type: none"> 各クラスにおいて、読書に取組み、語彙の増加や読解力の向上を図る。 	実施状況	毎日実施	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: fit-content; margin: auto;"> <p>自己評価の際に記入</p> </div>
3 継続	AIドリルを活用した家庭学習の導入	全学年5教科	通年で毎日実施	<ul style="list-style-type: none"> 家庭学習としてAIドリルに取り組みさせる。実施状況を担任等が把握し、家庭学習が出来ていない生徒には、学年として放課後補充教室を開講し、当該生徒を指名して、個別の指導を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 日常的に、担当者及び学年教員が実施状況を把握する。 年度末の生徒アンケートを実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> すべての生徒が1日に1時間以上の家庭学習を実施すること。 左記のアンケートの結果で、肯定的評価が60%を超える 	
3 継続	学力定着のための補充学習	全学年	定期考査前の教室やサマールの実施	<ul style="list-style-type: none"> 基本的には希望制とするが、状況によっては指名制とし、苦手教科克服の一助となるよう指導する。 対象生徒は、前期中間考査の平均点を下回る、区調査の正答率50%以下の生徒または、区調査正答率40%未満の生徒。 	<ul style="list-style-type: none"> 参加生徒のアンケート結果 参加生徒の、授業等での理解度の変容等を見取る。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒のアンケート結果で肯定的な回答80%以上。 定期考査等の得点を調べる。 	
4 継続	授業等におけるICT機器の活用及び実践	全生徒全教員	年間を通じた意識的実施	<ul style="list-style-type: none"> 全教員がICT支援員の支援を受けながら、分かる授業、興味関心を高める授業の達成に向けて、ICT活用能力の向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の授業評価 教員の学校評価 	<ul style="list-style-type: none"> 左記のアンケートなどで、肯定的な回答が80%を超える。 	

重点的な取組事項－２		生徒の豊かな心を育む			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
<ul style="list-style-type: none"> 自己存在感や自己有用感が向上するよう、生徒が主体的に活動する機会を多くつくる。 		<ul style="list-style-type: none"> 学校生活満足度に関する生徒の学校評価、および教職員自己評価の肯定的な評価が85%以上。 	自己評価の際に記入		
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
人間関係形成・社会形成能力、課題対応力、自己理解・自己管理能力の育成	生徒アンケートで学校生活に主体的に参加している項目の肯定的回答が80%以上	日々の委員会活動や学級活動、学校・学年行事、部活動、ボランティア活動等に生徒が主体的に取り組む指導を継続的に行う。	自己評価の際に記入		
キャリアプランニング能力の育成	生徒アンケートの学ぶことや働くことの意義に関する項目で肯定的な回答が80%以上	自己理解を基本に3年間を見通した進路指導を行うとともに、職業や進路に関する講演や職場体験等を通して学ぶことや働くことの意味や目的を理解させ、自ら主体的に学ぶ姿勢を養う。			
不登校の組織的な対応の充実	<ul style="list-style-type: none"> いじめアンケート（区年3回）及びQU（2回）の実施 SSRの5月の開設と周知、毎週の校内委員会の実施 	<ul style="list-style-type: none"> いじめアンケート、QU検査等をもとに、生徒の実態を教職員で把握共有し、組織的な指導に生かす。 SSRを定期的に開設するとともに、校内委員会を週1回、外部機関との連携を取りながら実施する。 			

重点的な取組事項－3		保小中連携の推進			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
<ul style="list-style-type: none"> 保小中連携推進を通じた児童・生徒の変容と落ち着いた学校づくり 		<ul style="list-style-type: none"> 教職員自己評価の肯定的な評価を80%以上にする。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: fit-content; margin: auto;">自己評価の際に記入</div>		
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
<ul style="list-style-type: none"> 教員同士及び保育士と教員間の共通実践項目を意識した連携の推進 	<ul style="list-style-type: none"> 「教員同士の連携」に対する教職員の肯定的な評価80%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 合同研修会（年6回以上）を中心とした連携活動を通して、保・小・中の関連ある項目や発達段階を踏まえた教科指導や児童・生徒指導の取組を行う。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: fit-content; margin: auto;">自己評価の際に記入</div>		
<ul style="list-style-type: none"> 教員・保育士と児童・生徒、生徒と児童との連携の実施 	<ul style="list-style-type: none"> 小学校の授業を、各教員が自主的に1回以上参観する。 「教員・保育士と児童・生徒、生徒と児童の連携」に教職員の肯定的な評価90%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 保小中連携事業プログラムに基づく指導案検討、授業研究を教科ごとに行う。 夏休みの補充教室支援。 児童の部活動体験。 学校説明会を2回以上実施。 他に、随時、小学校での授業観察や出前授業等の実施。 			

6 まとめ

(1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

【成果】

【課題および解決の方向性】

(2) 保護者や地域へのメッセージ

(3) その他（学校教育活動全般について）